

アジアの新出課題解決に向けたエビデンス ベースドアプローチ大学コンソーシアム 慶應義塾大学

大学の世界展開力強化事業
ASEAN対象プログラム
平成24年度採択

実施した交流プログラムの概要

アジアの新出課題解決に向けた エビデンスベースドアプローチ (EBA) 大学コンソーシアム

- フィールド分析と根拠 (エビデンス) に基づいた問題発見・分析・解決
- ビックデータの活用 (データの取得、解析、可視化) に重点
- 学際的な実力を有する専門人材を育成

共通科目群

データサイエンス
ソーシャルイノベーション
ポリシー&ガバナンス
IT

実践科目群

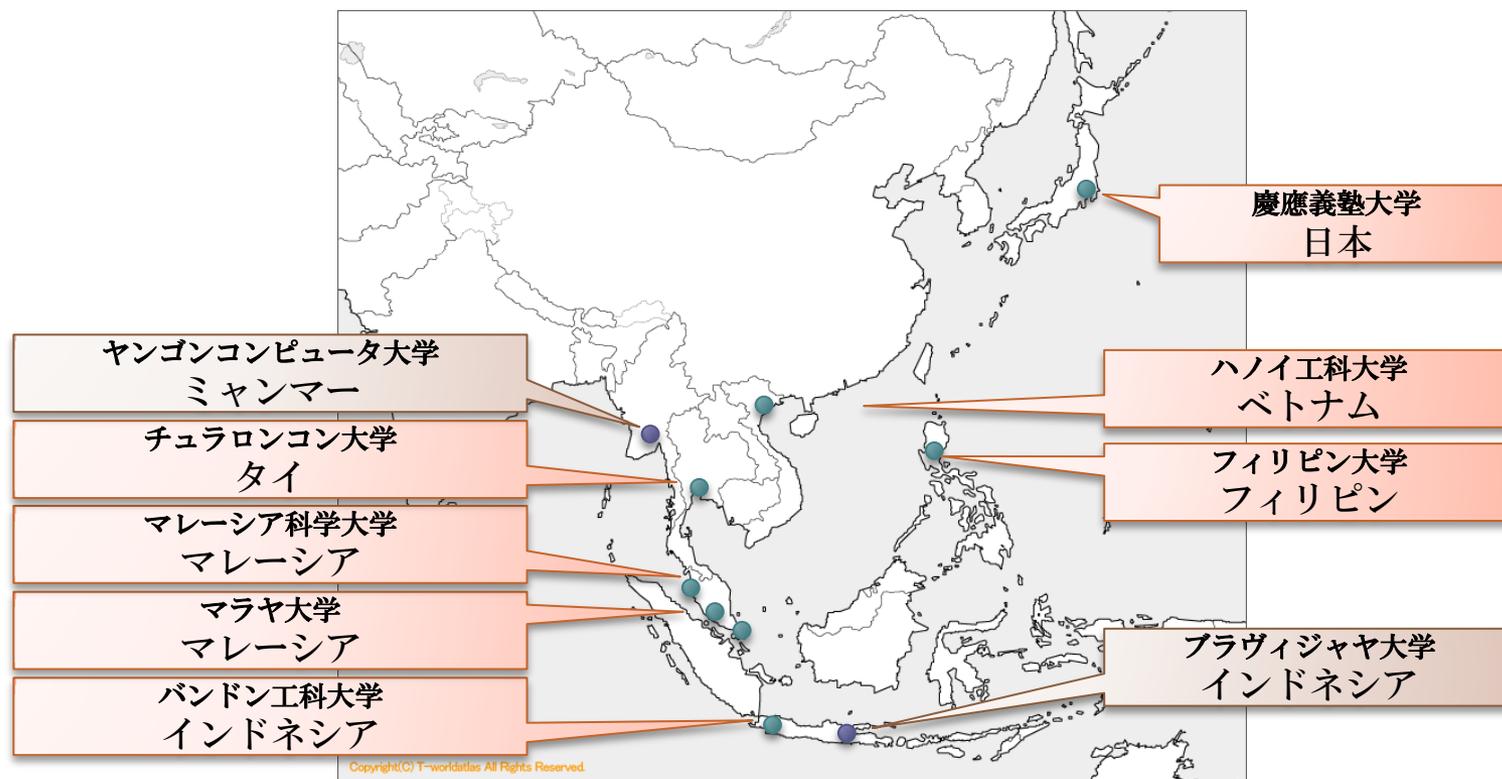
インターンシップ
フィールドワーク
ワークショップ

専門科目群

環境・エネルギー
健康・公衆衛生
防災・セキュリティ

EBAパートナー大学一覧

(2016年11月現在)



実施した交流プログラムの概要

東南アジアと地域を牽引するトップ大学との連携

大学名	東南アジア	国内
University Of Malaya マラヤ大学 マレーシア	5位	1位
Chulalongkorn University チュラロンコン大学 タイ	6位	1位
Universiti Sains Malaysia マレーシア科学大学 マレーシア	7位	2位
Institute of Technology Bandung バンドン工科大学 インドネシア	18位	2位
University of the Philippines Diliman フィリピン大学 フィリピン	27位	1位
Brawijaya University ブラヴィジャヤ大学 インドネシア	30位	6位
Hanoi University of Science & Technology ハノイ工科大学 ベトナム	46位	2位
University of Computer Studies Yangon ヤンゴンコンピュータ大学 ミャンマー		2位

<http://www.webometrics.info/en/Asia>

EBAインダストリアルパートナー大学一覧

(2016年11月現在)

- エビデンスベースドアプローチの取り組みへ賛同する企業を「インダストリアルパートナー」として組織化
- 活動の戦略立案や社会還元の在り方等に関して協業を推進



Router, Network device, Audio



Smart community, big data, application on cloud tech (intelligent transportation system)



Weather data analysis & service
(Mobile & Web app, Voyage route optimization, crowdsourced weather data)



Energy Business Development
(HEMS, FEMS)



Traffic Analysis in mobile data communication, Smartphone & Microcomputer board

実績

		H24 (実績)	H25 (実績)	H26 (実績)	H27 (実績)	H28 (見込)
派遣学生数	日本から ASEAN	7	14	4	67	91
	ASEAN 域内	-	-	8	42	48
受入学生数	ASEANから 日本	4	19	42	77	66
	国内参加	-	9	18	10	13

- 本プログラムでは、原則10日間程度のフィールドワークを通じた交流を実施している
- 派遣学生数のASEAN域内は、ASEAN地域で実施されたフィールドワークに慶應義塾大学以外のパートナー大学からの参加者数
- 受入学生数の国内参加は、日本国内で実施されるフィールドワークに参加した慶應義塾大学の学生数

EBAフィールドワーク

33 (10 / year)

fieldworks

8

universities

7

countries

392

fieldworkers

108

outputs (videos / posters)

実績

フィールドワーク実施地域



EBAインターンシップ

ビジネスと直結した研究活動
企業での即戦力になりうる人材の選考・獲得



Financial policy for Internship Program is half supported by Re-Inventing Japan Project of Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan since 2012 and half supported by companies

アクティブ/ブレンデッド ラーニング

フィールドワークやインターンシップに遠隔授業環境を活用

Open Seminar (全大学参加の遠隔セミナー)

- 研究発表
- フィールドワークの成果発表
- 情報共有/アナウンス

日本語授業 (最低限の表現・知識を教授)

- 基本的な挨拶や日常会話
- 食べられない食材の申告
- 緊急時の対応方法 (アナウンスの聞き取り等)



質の保証を伴った交流枠組み（相互単位認定、共同学位プログラム等）の形成

■ EBAプログラム（共通カリキュラム）

- すべてのパートナー大学の協力/合意によるカリキュラム
- パートナー大学でのフィールドワークの実施（フラヴィジャヤ大学を除く8大学で実施）

■ EBA Certificateの発行

- パートナー大学や企業のニーズに適合する、学習内容の詳細が記載されたサーティフィケートを提供
- 1:1ではなく多くの大学とコンソーシアム形式をとったため、全参加大学間でのフルメッシュでの単位相互認定の実現は困難だった

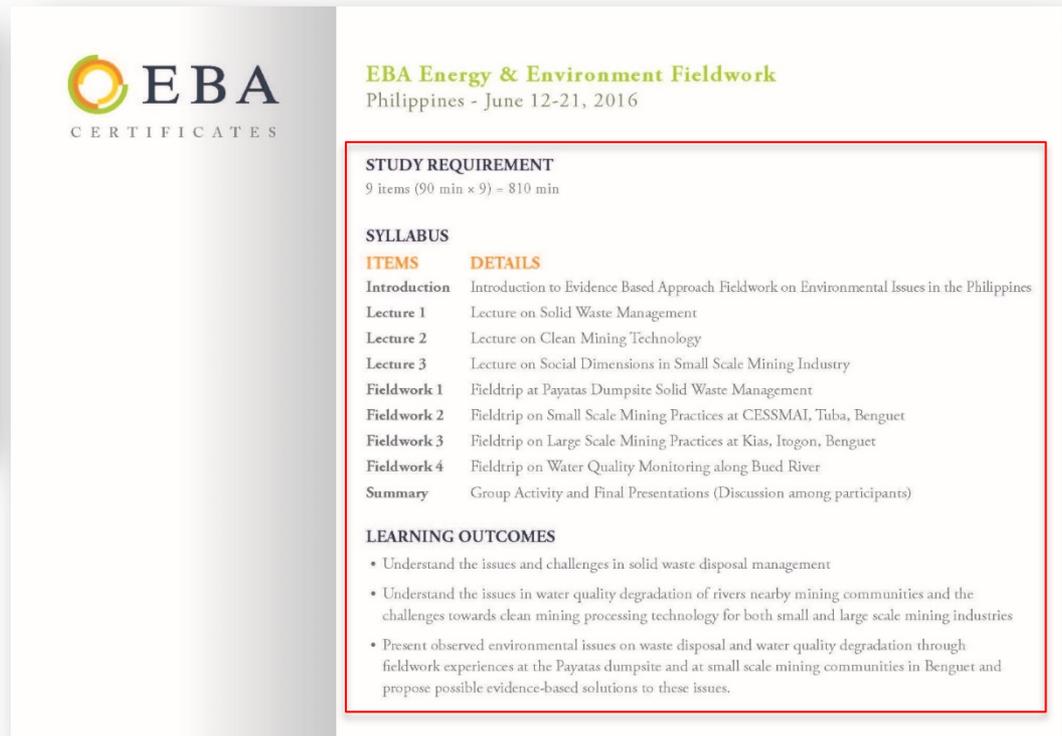
■ 慶應義塾大学における単位化と制度の整備

- 遠隔授業や短期滞在のフィールドワーク参加者へも単位を認定できる制度の構築とその運用
- インダストリアルパートナーとは正式にコントラクトを結び、定期的にミーティング・フィードバックを受けている

EBA Certificate



表面



裏面

質の保証を伴った交流枠組み（相互単位認定、共同学位プログラム等）の形成

EBA Certificate

これまでの発行数

Overview

Academic Year	# of Courses	# of Students newly registered	# of Students obtained certificates	# of Certificates issued
2012	6	11	11	11
2013	11	49	50	52
2014	20	124	134	192
2015	31	191	198	395
2016	14	95	111	227
	82	470	504	877

Course Category

Academic Year	Fieldworks	Internships	Core Courses	Specilized Courses	Practical Courses	TOTAL
2012	5	1	-	-	-	6
2013	5	5	-	1	-	11
2014	7	6	5	-	2	20
2015	12	6	11	-	2	31
2016	6	1	6	-	1	14

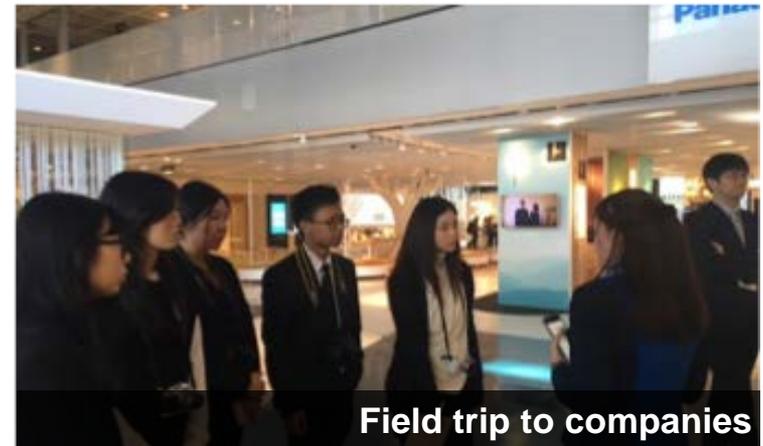
*2016は2017年2-3月に
さらに5フィールドワークを予定

質の保証を伴った交流枠組み（相互単位認定、共同学位プログラム等）の形成

インダストリアルパートナーによる評価

風間博之
株式会社エヌ・ティ・ティ・データ技術開発本部長

ビッグデータ時代には分析処理におけ「データプラットフォーム+ICTインフラ」が重要となる。「オープンソースの活用+標準化」においてEBAを中核とした大学主導の連携は益々重要となる



國尾武光
日本電気株式会社 執行役員

通信やエネルギー。成長分野のシステムはこれまでの集中型から、IoTによる分散型に急速に変わっていく。データが境界を越え世界中で扱えるようになっていくときに、それを扱える人材は重要。EBAではそういう人材を産み出し、当社でもベトナムからの“EBA卒業生”が活躍している



質の保証を伴った交流枠組み（相互単位認定、共同学位プログラム等）の形成

プログラム参加後の学生のフォローアップ・出口対策

■ ラーニング・コミュニティの形成

- Open Seminarをはじめとするフォローアップ体制を構築
- SNS (Facebook) を活用した交流（プログラム参加後も継続）

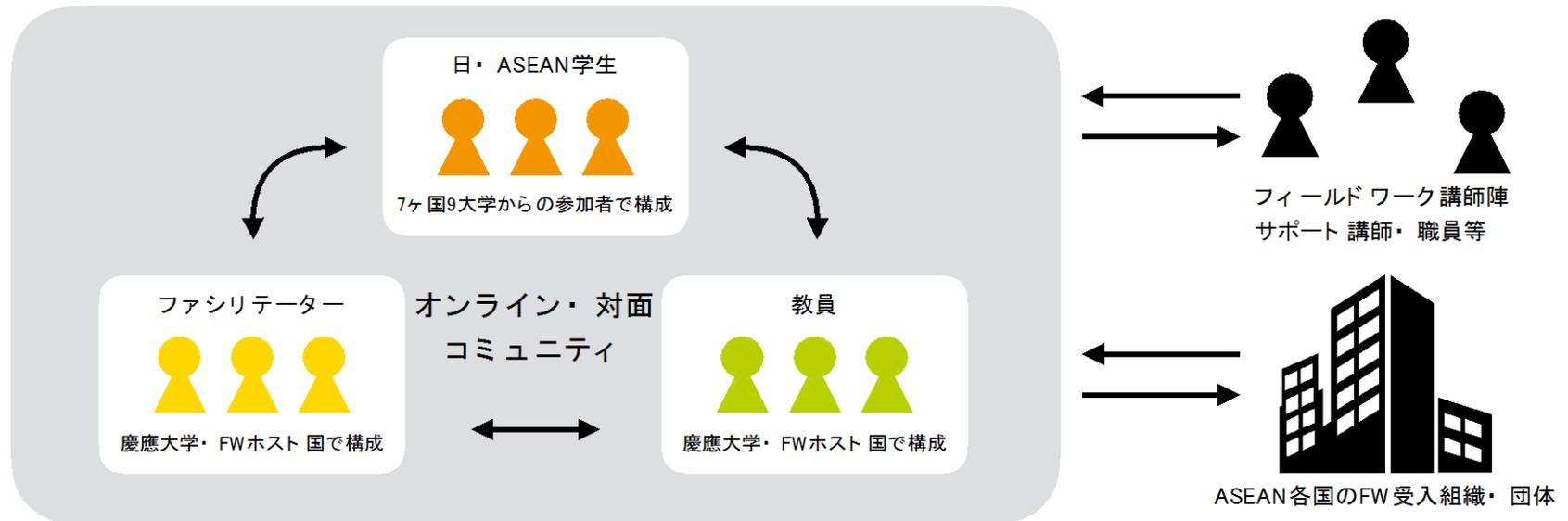
■ EBA Certificateの活用

- サーティフィケートのオンライン発行（就職面談等での活用）

■ パートナー大学・インダストリアルパートナーとの連携

- オープン講義（遠隔による日本語講座）や研究支援（プログラム参加学生の留学を受入れ）を通じた出口サポート
- インターンシップを通じた、即戦力となりうる人材のキャリア形成支援

ラーニング・コミュニティの形成



プログラム参加後の学生のフォローアップ・出口対策

フィールドワーク参加学生の現在（事例）

多山恒太朗（慶應義塾大学総合政策学部 4年）

- 開発経済学を専攻
- ベトナムフィールドワーク（2015）参加後、計4つのFWに参加
- 現在：アジアをフィールドに研究を継続。修士課程に進学予定



NGUYEN THI THUY LINH（ハノイ工科大学卒）

- 水俣フィールドワーク2014に参加
- ベトナムフィールドワーク（2015）ファシリテーター
- 2016年：東北大学大学院経済学研究科入学、在学中



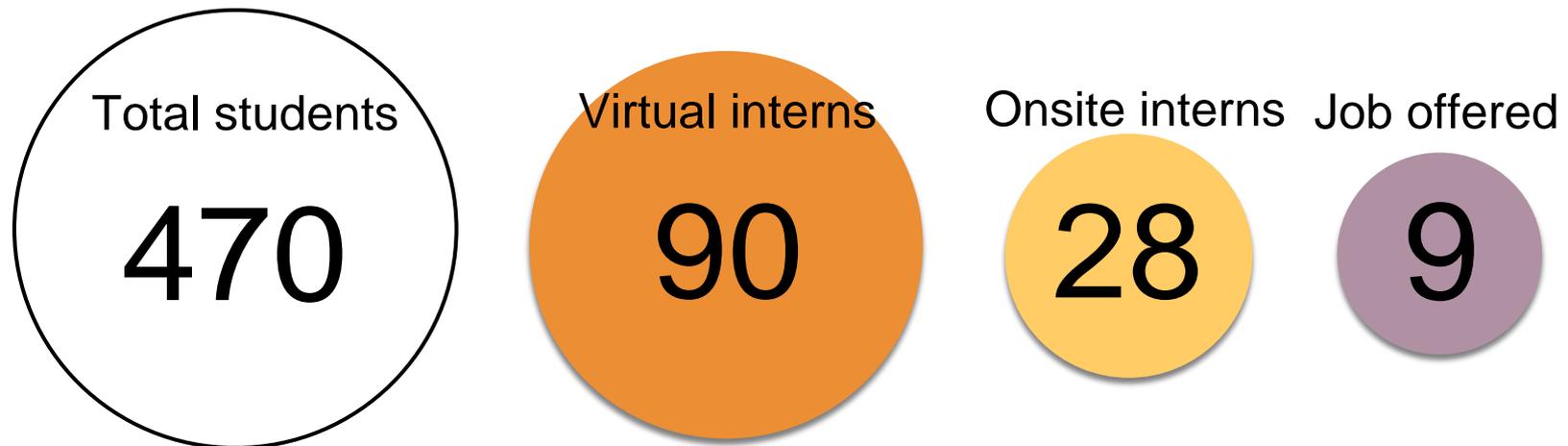
Ma. Brida Lea Diola（フィリピン大学ディリマン校卒）

- 水俣フィールドワーク2013に参加後、同大講師に
- フィリピンフィールドワーク（2014～）ファシリテーター
- 2015年夏季：湘南藤沢キャンパス植原研究室が留学受入れ



インダストリアルパートナーとの連携

日本で就職を決めた学生の人数 (As of Nov 2016)



プログラム参加後の学生のフォローアップ・出口対策

インターンシップ参加学生の現在（事例）

EBAがアジアの才能と日本を繋ぐ

EBA卒業生が日本企業で活躍の場を見つける

新しい事を学ぼう、課題に挑む強い意志
卓越した論理コミュニケーション能力
大学での研究活動において有する成果

ベトナム出身のAnh君は、現在、日本のIT企業においてエネルギーマネジメント関連の海外事業戦略を構築する業務に従事



Mr. Anh (center)

日本の若い学生との交流にも熱心。2016年3月には福岡県立東筑高等学校（スーパーサイエンスハイスクール）を訪問、日本のエネルギーマネジメント先導地域である北九州モデルのアジアでの普及可能性に関する討論に参加

Profile	Action
Vietnamese MBA student who work full-time as telecom sale team leader	Present energy business model to senior executive and currently work as assistant manager

プログラム参加後の学生のフォローアップ・出口対策

情報の発信・成果の普及

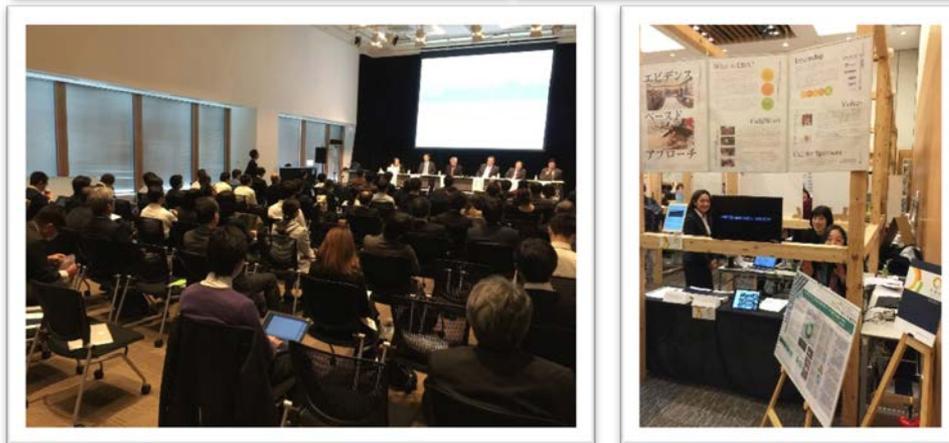
■ 大学内での取り組み

- パンフレットの作成/配布
- 研究発表イベント（湘南藤沢キャンパス主催 Open Research Forum [ORF]）でのブース展示/シンポジウム開催
- 公式サイトやSNS（Facebook）を活用した情報発信

■ パートナー大学・外部団体からの情報発信

- パートナー大学主催の国際フェアでの展示・対外発表
- 公共施設での成果公開（ポスター展示）/新聞への記事掲載

大学内での取り組み



パンフレットの作成・配布
(日・英)

ORFでのブース展示・シンポジウムの様子
(2014年～毎年実施)

情報の発信・成果の普及

大学内での取り組み

最新情報・フォトギャラリー,
etc.

各記事：200～1500リーチ



公式サイト



Facebook公式ページ

情報の発信・成果の普及

パートナー大学・外部団体からの情報発信



タイ：チュラロンコン大学 (2014～)



水俣市：水俣市役所



フィリピン：フィリピン大学 (2016)

国際フェアでの展示・対外発表



メタボローム
解析技術に触れる



ASEAN学生 次々質問
最先端研でフィールドワーク



熊本新聞・荘内日報・山形新聞

公共施設での成果公開/新聞への記事掲載

情報の発信・成果の普及

成果のまとめ

ASEAN地域の参加大学と協同で作上げたカリキュラムとその運用

- 全ての参加大学におけるフィールドワークプログラムの実施体制
- Open Seminarや日本語授業など遠隔授業の活用体制
- 持続的なCommunity Environmentの創出
- 学生の需要に合致するサーティフィケートの発行体制と一部の単位認定

プログラム参加学生の国際的な活躍

- 本プログラムをきっかけとしたキャリア形成（アカデミック含む）
- ASEAN地域の優秀な学生と日本企業のマッチングの成功、日本企業への就職
- 実践社会での活躍（青年海外協力隊・グローバル企業・進学・研究所, etc.）

今後の展開

2017年度以降もEBAコンソーシアムの枠組を サステナブルに継続

慶應義塾大学における学内制度の改正

- 短期滞在時の学生身分（協定学生制度）
- パートナー大学で遠隔授業を履修する学生への単位の提供
- クォーター制を活用したフィールドワークへの参加
- パースペクティブ（湘南藤沢キャンパスの独自制度）としてのプログラム形成/全学への普及促進

産学連携を次のステージへ展開

今回得た実績（インターンシップやフィールドワークによる人材交流、IoTのアーキテクチャに関する共同研究による交流）を次のステージ、具体的には、エビデンスベースドアプローチの社会還元や産業化へつなげていく